

手軽に写真が撮れる時代だからこそ、
プロとしての技術を大切にしたい



写真撮ることについても、体力というか気力というか、年齢的に充実している時期というのがあるんです。その40から50歳代の脂がのった人たちも参加するコンテストで、60歳代のわたしが運良くグランプリを取ることができたという点で、今回の受賞は素直にうれしく思っています。

この作品は、構想に1年くらい費やしました。「あの背景の窓や光はどうやって作ったの？」なんてよく聞かれるんですけど、実は、厚紙で作った簡単なものを使ってあるんですよ。そこから、照明、モデル選び、構図など、工夫に工夫を重ね



● 富川 哲さん（東栄町・66歳）

第7回（平成15年度）社日本写真文化協会主催の「ハイテクニカル・フォトコンテスト」で、見事グランプリを受賞。



ね、一つの作品として仕上げていきました。もともとカメラは好きでも嫌いでもなかったんですが、父親を引き継いで、写

真館を経営するようになりました。もう40年以上になりますが、常に人のやらないことを、人と少しでも違うことをやろうと思って撮っています。ちょっとへそ曲がりな性格なんです。普段の生活の中でも、常に観察する目だけは働いて、いつもイメージを頭の中で作っています。「この人を、こう撮ったら美しい表情になる」とか思いながら。ただ、あんまり人をじっと見ていると、時々変な人に見えることもあります。（笑）

デジカメ、カメラ付き携帯電話などの登場で、誰もが気軽に写真が撮れるようになり、写真に対する価値観が変化したため、この業界は現在、斜陽の時代を迎えています。また、わたし自身も年を重ね、気力や体力がうせがちですが、プロとしての技術だけはなんとか維持し、そしてプロとしてのプライドだけは捨てずに、これからもがんばっていききたいと思っています。



グランプリ受賞作品「19回目の春」。モデルは写真館に客として訪れた地元の青年にお願いしたそうです。